

## 14. シェーグレン症候群患者の唾液腺組織におけるREGタンパクの発現について

病理学 (人体分子)

木村時子, 関川 昭, 藤井茂彦, 福井広一, 市川一仁, 富田茂樹, 井村穰二, 藤盛孝博  
内科学 (消化器)

山岸秀嗣

口腔外科学

川又 均, 今井 裕

【目的】シェーグレン症候群は唾液腺と涙腺に慢性炎症が生じる原因不明の疾患である。我々はこれまで隣再生関連因子であるREG I $\alpha$  蛋白が胃炎や大腸炎において消化管粘膜の再生に重要な役割を果たすことを報告した。本研究では、唾液腺組織におけるREG I $\alpha$  蛋白の発現を検討し、シェーグレン症候群患者の唾液腺炎組織におけるREG I $\alpha$  蛋白の発現意義を明らかにすることを目的とした。

【対象及び方法】本研究では、厚生省1999年改訂診断基準でシェーグレン症候群患者と診断された40名を対象とした。シェーグレン症候群患者の下唇部より唾液腺検体を採取し、REG I $\alpha$  蛋白の発現およびKi67の発現と臨床病理学的因子の関連を検討した。

【結果】REG I $\alpha$  蛋白は唾液腺組織において導管細胞に発現を認め、その発現は唾液腺炎組織で強発現した。REG I $\alpha$  蛋白が強発現する患者群ではKi labeling indexが有意に高値を示した。

【結論】REG I $\alpha$  蛋白の発現はシェーグレン症候群患者の唾液腺炎組織において導管細胞の細胞増殖に関与すると考えられた。

## 15. フィリピン・東ミンドロ州の脳症型日本住血吸虫症

医学部 学生

鎌田祐子, 石井寛人, 河原真木子, 篠崎浩之, 高橋 充, 宮島大河

国際教育研究施設

桐木雅史, 千種雄一, 大平修二, 松田 肇

市立甲府病院

林 正高

【目的】日本住血吸虫症は日本においては終息宣言がなされ、新規患者の発生を見ない。しかし、中国・フィリピンにおいて本症は猛威を振るっており、大きな問題となっている。今回、フィリピン・東ミンドロ州の脳症型日本住血吸虫症 (脳日虫症) の疑いのある9症例を詳細に調べたので報告する。

【対象・方法】脳日虫症の疑いがある9名について、糞便検査 (Kato-Katz法)・免疫学的検査 (ELISA法)・肝臓超音波検査を行い日本住血吸虫感染の有無を調べた。さらに神経学的検査を行い、それらの結果から脳日虫症か否かを判定した。

【結果】今回診察した9名のうち、脳日虫症であると診断されたのは5名であった。残りの4例は真性てんかん、脳器質性疾患各1例と、解離症候群2例であった。

【考察・結語】今回は日本住血吸虫症流行地において、脳日虫症が疑われている患者を集めて診察したが、脳日虫症は9例中5例であった。本症流行地であっても種々の神経疾患を念頭において鑑別診断をすることが重要と思われる。